

三浦綾子の作品『雪のアルバム』。そのページを開きましょう。

芦屋、神戸三浦綾子読書会

編集者 森下 辰衛先生より著作権のお許しをいただいています。私（三浦）に、いかようにもお使いください。

三浦 綾子の名前だけ出してくださいました。

先生は、全国の小さな数人々の教会で三浦 綾子の愛の本を紹介しています。

昨年一月十四日宮城県塩釜市玉川の教会

『塩釜ともしびチャペル』

で一時間半講演し、お茶をみなさんでいただき、夕方、牧師さんがホテルに送っていききましたが、私がキャリアのない大きなバッグを車に積むとき、重くて（売れない本？）ビックリしました。

国立山口大文学部・同大大学院・九州女学院大助教授で、北海道・旭川に居を構えて、三浦 綾子記念館・特別研究員です。

主人公は「私」、もうすぐ二十三歳になる浜野清美。

北海道旭川そして札幌を主なステージに、五歳の頃から生きてきた日々の時間が、読者の目の前に展開されます。

「清」と「美」しいという名前を恥ずかしいと感じ、親を憎みさえする感情を持って自分を見つめてきました。

その名前を付けてくれたかもしれない父の顔を清美は知らない。母と二人での生活。母には何人かの男の友人がいて、かわるがわるやってくる。

そのたびに母から、「いいと言うまで表で遊んでるんだよ」と百円を渡され、表に出されます。

晴れた日はまだいいが、雨の日も風の強い日も、凍るような寒い日でも、（死んでしまいたいような淋しさ）

を、近所の人の好奇の目を受けながら耐える。

まだ、小学生にもならない女の子の耐え難い体験です。

清美が五歳の時の六月、旭川のお祭りの日。家の前にも花笠が高くなるされて、浮き立つような風景があります。

でも、その日も母に言われて表に出され、淋しさを紛らわすために、独りで地面に絵を描いては消し、また描いたりしていたとき、気が付くと、いつのまにかうしろに女の人が立っていました。

「アルバム」が輝きを見せる、場面です。

このページがなければ、清美のそれからの人生は、全く違った色彩のなかであえぎ、希望をさえ見いだせないものであったことでしょう。

その女の人は、品のいい顔立ちをほころばせて、

「あなた、清美ちゃんね」

見ず知らずの人から、「清美ちゃん」と呼ばれて、びっくりします。どうして名前を知っていたのか。

「清美ちゃん、小母さんと一緒に、ちよつとその辺まで行ってみないつ。」

清美はためらわずに、「うん」と、答えました。

「小母さんどこの人」と、たずねると、

「小母さんね、札幌からきたの」

二人が家の近くの清美の大好きな草原まで来たとき、その人が清

美をひしと、抱きしめて、はらはらと涙をこぼしたのです。その時、どんな話をしたか、どれくらいの時間だったかおぼえていないけれど、その人が、

「あのね、清美ちゃん、いい歌を教えてあげるわね。おぼえてくれる？」

清美はうなずき、本当にその人が好きになったと告白しています。

優しい美しい声で、その人は、幾度も幾度も歌ってくれました。

かみさまは のきのすすめまで

おやさしく いつもまもりたもう

小さいものをも めぐみたもう

清美もその歌を歌うと、その人はうれしそうに聞いてくれて、白いハンドバッグから千円札を出し、ちり紙に包んで、

「お祭りのお小遣いよ」

と、清美の手に握らせて、その人は帰って行きました

幾度も幾度も振り返りながら。

うれしさのあまり、清美はもらった千円札をひらひらさせながら走って帰る途中、近所の女の子と出会います。

自慢げに千円札をひらひらさせてみせると女の子は、

「それ、どこでひろったの」と言い、

「ひろったんじやない、よその小母さんにもらったの」

「よそのひとが千円もくれる？」と、疑われ、ついには、店屋から盗んできたにちがいないと言いだし、清美の家までついて来て、

「おばさん、清美ちゃんが店から千円とったよ」と、大声で叫んだのです。

子ども仲間から「どろぼう」扱いにされ、仲間外れにされてしまう。子どもたちから離れ、一人ぼっちで遊ぶつらさ。それも毎日、来る日も来る日も。

そんなある日、ひとりの男の子が札幌から夏休みでいじめっ子の家に来てきました。名前は章。いじめっ子もたちの中心の役割の女の子とは、わけありの義理の兄、その章が、清美から当時の話を詳しく聞いた後で、言いました。

「この子はどろぼうじゃない」
誰か、この子がどろぼうしたところを見たのかと、子どもたちに迫り、清美の悲しく、苦しい心を解放したのです。

やさしく抱きしめて、あの歌を覚えてくれた美しい小母さん、そして章。二人の住む札幌は清美にとって特別の地となった。

この二人との出会いが、清美が二十三歳になるまでの年月、その間、大きな存在となってさまざまな場面に登場する

『雪のアルバム』。

そのアルバムのページのあちこちに、清らかな輝きを放ちます。

清美の人生の「足の灯」となり「希望の光」となって導いていきます。

清美は四年生の頃から花の絵を描くようになっていきます。

母は言います、

「また、花の絵か、血は争えないもんだね」

アルバムの中で、非常に大きな意味を持つことになる言葉です。

清美の絵の才能は開花していきました。

ついに五年生のクリスマス、旭川市の小学校の代表として「金賞」を

受けた絵が北海道全域の展覧会に出品されることになったのです。その結果、北海道一に選ばれました。

普段、あまり関心のない母もこれには大変喜んで、「これはどうしても、札幌まで展覧会を見に行かなければねえ」

奮発して着物を新調したりしますが、でも当事者である清美の着る物のことは思いつかなくまま、日にちが迫ってきます。

母もそのことに気付いて、日曜日の朝、清美のセーターでも買いに行くことになり、出かけようとしたとき、書留速達で郵便小包が届いたのです。

開けてみると、清美用の洋服、水色のワンピースが出てきました。送り主は清美の知らない人の名前でしたが、その洋服は清美の体にピッタリと合った、センスのいい仕立てで、清美が今まで着たどの服よりもよく似合いました。

鏡のなかの、自分の姿に見はれる清美。体全体を包んだ「水色」が清美の心をも変えていったと感ずることができます。

清美と母は、札幌での授賞式に臨みます。

知事代理や市長に次いでお祝いの言葉を述べる羽織袴の男の人は、活け花の世界では北海道でも名前の知られている先生との紹介がありました。

「美しいものが解らなければ、本当の人間になることはできません」

静かな声と共に、温かい、優しい目が清美に注がれ、清美もしたわしい気持ちで、じつとその人を見つめていました。

授賞式の後のお茶とケーキのパーティの場で、その男の人は清美に近づいてきて、

「おめでどう、いい絵だったね」

と、話しかけます。心地よい声と優しい話し方をする男の人に清美の心は打たれました。

「花は好きかね」

その人に聞かれ、

「大好きです」

清美が少し固くなって答えると、

「水色がよく似合うんだね」

と、微笑み、清美の母には、

「いいお子さんですね」

と、声をかけましたが、母はじつと床に視線を落とし返事もしません。

「じゃあ、またいい絵を見せてほしいな。元気でねと、離れて行くのでした。」

「絵を見に行こうよ、絵を」

と、母が言い、会場に戻ると、中央に飾られた絵の前は、大勢の親子づれが立ち止まって見ていました。

清美は、はっとして息を止めます。

かみさまはのきの小すずのまで…

清美を抱きしめて、はらはらと涙をこぼし、きれいな声で繰り返して、繰り返して、あの歌ってくれた、女の人の、実に美しい立ち姿がそこにあつたのです。

「小母さん」

清美の声に、「まあ！清美ちゃん！」

この人は、なぜ私の名前を知っていたのか、確か、最初に会った五歳の時も清美の名前を呼んだのです。

「おめでどう。とても上手な絵ね」

と、忘れられない、あの優しい声でした。

清美は、小さい声でしたが、歌いました。

かみさまはのきの小すずめまで…

会うことがあったら、必ず歌おうと、心のなかに決めていたのです。

「まあ！おぼえていてくれたのね」

その人の目から、はらりと涙がこぼれました。

アルバムが輝きを放つページです。

そこに、母が近寄ってきて、「沙織さん、清美の服をありがとうございます」

(この人が、私に服を贈ってくれたの)清美の胸は踊りました。

「よく似合ってよかったわ、今日着せてくださってあり

がどう。わたし、とてもうれしいわ」

「清美ちゃん、また、会いましょうね。お元気でね。また、いい絵を

描いてね。歌も聞かせてね」

言葉の一つ一つ、に思いをこめるように言ってくれます。

「小母さん、服ありがとうございます」

清美は胸がつかまって、言葉が続きません。

(別れたくない)

そんな清美の顔を、小母さんの優しい瞳がじつと見つめます。

これが、地上での永遠の別れとなりました。

絵を見た小母さんは、そのデパートを出たところで青信号の交差点を渡っているときに、無謀運転の若者の車にはねられたのです。

人の妻に子を産ませた兄の罪が厳格な両親の知るところとなったとき、間に入って兄の罪の許しを執りもった姿や、やさしい姿と心のこもった声で、大切な歌を清美に教えてくれ、喜びと希望をもたせ、はらはらと涙をこぼして抱きしめた姿。

必要を服を、ぴったりと身に合わせて、遅れることなく、速達でよえて、水の色をもつて清美のすさみかけた全身と心を包み、喜びに変えてくれた。

叔母、船戸沙織。

その一つひとつ、同じ三十三歳まで、地上で人類になされたあの、イエス・キリストの雛型として、女性の姿に代えて、物語の作者三浦綾子は、作品の中心に据えたと読み取ることができます。

アルバムには、中学生になった清美の生活が現れます。

中学校のすぐ近く、帰り道にある小川にかかる狭い木の橋。白い春の雲が、川面をゆつくりと流れている。

そこで、思いがけなく小学校の時、どろぼう扱いされた清美をかばってくれた、あの章と出会う。章は中学三年になっていました。

心の中に焼き付いていたあたたかい目で、章は照れ臭そうに通り過ぎて行ってしまふ。

川辺には、忘れな草の花が、やさしく風にゆれています。

そうしたある日、学校から帰ると、血相を変えている母に、

「さあ札幌に行くのよ」

と、うわずった声でせかされる。

「札幌へ？」

「あんたのお父さんが、悪いんだって」

「私のお父さん？」

清美の父ではあっても、母には愛する夫とは呼べないその胸中には計り難いものがあった。

愛には時として厳しさを求められます。

小学五年生の時に一度会ったきりの、あの父、抱き続けてきた面影。父として、娘として、会う日が必ずあると信じていた清美でした。

「くもまつか出血だって、手術の最中で、命の保証はできないんだって」

札幌行き最終急行に間に合う。母は顔にハンカチをあてたまま嗚咽し続ける。ハンカチは涙で、ぐしゃぐしゃです。

清美は、母の父への変わることをない滴る程の愛を感じました。

病院に着くと、父は手術中、どんなことがあっても、父には生きていてほしいと、切実な思いが湧いてくる。

死ぬかもしれない父のそばにいて、清美は父を身近に感じたのです。

次の日、清美は初めて、姿ハルという人に会う。

洋服の差出人の名前でした。あのやさしい叔母、沙織のことを聞く。

「沙織さんのような人は、本当にこの世に二人とはおりませんよ。あんなに美しい人でしたから、縁談は降るようになりまして。そ

れどころか、沙織さんには心から好きな人もいたのです。その好きな人をさえもあきらめた沙織さん。周りの人も心を痛めました」

婆ハルは清美の母に、「沙織さんは何と言ったと思いますか？」

わたしは、兄の罪を万分の一でも償いたい。

わたしが独身で通すことで、あなたと清美ちゃんにお詫びをしたい。

そんなことでお詫びになるとは思えないけれど、わたしは、そう神様の前で誓ったのって、涙をこぼされました」

婆ハルは泣いていました。

自分の兄が妻のある身で、他の女性に子どもを産ませた罪を、兄に代わって自分が背負おうとした清美の叔母、沙織。

初めて叔母とも知らずに会った、あの祭りの日、家の近くの草原に、ひとりぼっちで遊んでいた幼い清美を連れて行き、ひしと抱きしめて、ほろほろと涙をこぼした叔母は、どんな思いで抱きしめたのか、涙をこぼしたのか、それは深い愛であったことが、清美にもよくわかりました。

『あなたのお父さんをゆるしてね』ぎんげの思いがこもった愛だったことも。そして、清美への何よりの贈物は、素晴らしい神の愛を伝えることだと叔母は思ったにちがいない。それが、あの歌であったのだ、と。

アルバムのページは移ります。

一方では、清美の高校生としての生活では、あの章との爽やかな

関係が続いている様子が収まっています。

同じ一年生で、同じ美術部にいて清美を慕っている野理子がいる。素直な明るい子で、苗字は加奈崎という。

その父は加奈崎盛夫。野理子の父こそ、清美の小学生の頃、母のもとによく通っていて、一時は父と呼ばされ、清美は父のいない淋しさから、よく甘えていた。

やさしいところがあつたが、ある夜、清美の母のいない夜に来て、生涯、清美が拭い去ることのできない行為で心に大きな傷を残した張本人でした。

さすがにそのことは章にも言いだせない。いつか復讐しようとしている。当然ではないかと。

ある日、清美は野理子の誕生パーティに招かれます。

野理子の兄と友人関係の章も来るということでした。

(あの加奈崎も一緒なのか)

清美は、さり気なく、庭に木立のある豪壮な邸宅に向かいます。

パーティが進むなか、遅れて、あの加奈崎が入ってくると、

「パパ、浜野清美さんよ」

と、野理子が得意そうに清美を紹介すると、

「えっ？ 浜野清美？」

加奈崎の目が驚きに見開かれ、口はぼかんと開いたまま。清美の目はじつと加奈崎に強く注がれる。

一瞬であれ、驚愕の表情を見せたことに清美は満足する。

パーティが終わって清美と一緒に加奈崎邸を出た章が、「君は、ぼくにとつて、誰よりも大事な人なんだ。

だから聞くんだ。清美ちゃんはいつか、お母さんの話をしただろう。

ぼくは、そんなお母さんを持つている君の不幸を、共に担おうと思つていた。

一生負い続けなければならぬその重荷を、ぼくも負いたいと思つていた。

君は、お母さんの相手が、野理子の父親だと知っていたんだね。

そして、君は、あの家に乗り込んだんだね」

乗り込んだ、という言葉が清美の胸に刺さります。

「そんな君はぼくは嫌いだ。そんな恐ろしい君は嫌いだ」

さようなら、の言葉を残して清美に背を向け、暗くなつた夜の道を、章は走り去ってしまいます。

暗闇のなかに一人たたずむ清美の姿があります。

アルバムは、暗い闇の中でさまよう清美を映していきます。

「さようなら」の言葉を残して章が去つて数カ月、清美の高校生生活は、魂の抜けたような時間でした。

高校を卒業した清美に三月のある日、小さな郵便小包が届き、差出人の名前がない包みを開くと、小型の黒い表紙の新約聖書が出てくる。

表紙を開いてみると、そこには

『心の清い人は幸いである。その人は神を見るであろう』と、書かれていました。

清い、は清美の名前でもある。清美は直感的に、(章からだ)と思つた。

章は見捨てて去つたのではない、と確信し、喜びがわいてきます。

清美は告白します。『一本の素枯れた草その草が青くたんたんとした、うるおいのある野の草に変わつて行つたのです』

愛は奇跡を生むものなのです。

聖書を開き進めていくと、『互いに重荷を負い合いさい』という言葉に朱の線が引かれており、それは、清美の心に食い込むように入りました。

（あの人は赦していてくれたと、いう喜びに包まれ、（この聖書と共に生きて行こう）と、決めました。

『重荷を共に負おう』と言ってくれる人がいる。清美には大きな慰めであり、強力な励ましとなったのです。

アルバムのページはまだ続いています。

清美はケガをしてしまい、病院に運ばれ、それを偶然目撃していた章が入院中の清美を見舞いました。

「じゃあ章さんは私を許してくれていたのね」

「許してほしいのはぼくの方だよ、お互いの重荷を負い合う相手は、ぼくにとって清美ちゃんなんだ」

清美もこの言葉に励まされて生きてきたと打ち明けると章は、

「自分は教会に行っていて、イエスキリストから赦しを受けている、赦された自分が、どうして人を責めつづけることができるだろうか」と言う。

二月半ばの寒い雪の日、清美と章は喫茶店で温かいコーヒーを飲んでいきます。世の中は寒くても体の中に熱いものが流れ込んできています。

清美は今までの自分の感情を全て章に話します。章にもらった聖書を読み続け、神の愛が解ってきたながら、それでも、こんな自分が神に受け入れられるかと悩んでいることも。

章は言う、

「そうした、どうにもならない人間の存在のために、キリストがその罪を背負って、代わりに死んでくださったのだよ」

清美は(そのままでもいいのだよ)という、あたたかい神の声を、この寒い雪の日に聞き、神の救いを信じたの夜、清美は夢を見ました。

あの、叔母の沙織が、きれいな花園でひとり、歌を歌っている夢でした。

果しなく続く美しい花畑に、歌声が流れます。

かみさまはのきの子すずめまで

やさしくいつもまもりたもう

ちいさいものをもめぐみたもう

清美が思わず駆け寄ろうとしたとき、叔母の姿は消え、すずめが二羽、眩しい光輝く空に飛んで行きました。

二羽のすずめと輝く光、清纯に神の下に生きた沙織が、神様の光の中に清美と章を導いていく姿ではないでしょうか。

これは夢でしょうか。

作者三浦綾子が、作中の二人に贈る祝福のアルバムのページとも感じます。

この作品のバッググラウンドには、小さなすずめの存在が流れています。

聖書には『二羽のすずめは一アサリオンで売っている』

と記す(マタイの福音書十章二十九節)。当時の最少単位の銅貨、その程度の価値の扱いです。

神様は、とるに足らない扱いのすずめだから、尚さら、優しく愛しておられるのだと確信するまでに清美の心は変えられていったのです。

清美は、聖書『詩篇第五十一篇』の言葉に出会います。
それは、大きな慰めでした。

「わたしの不義をことごとく洗い去り

わたしの罪からわたしを清めてください。

わたしは自分のとがを知っています

わたしの罪はいつもわたしの前にあります。

見よ、わたしは不義のなかに生まれました。

わたしの母は罪のうちわたしをみごもりました

ヒソプをもって、わたしを清めてください、

わたしは清くなるでしょう。

わたしを洗ってください、

わたしは雪よりも白くなるでしょう。」

『雪よりも、雪よりも白くならしたまえきみの血潮にて
(インマヌエル讃美歌三〇六)』